

泳ぐ焼き魚	死因は二次放射能障害	白魚	原爆忌を迎えて	濡れた千羽鶴	ヒロシマの遺臭	朝日新聞記事
--------------------	-------------------------	-----------------	----------------------	---------------------	----------------------	---------------------

ヒロシマの遺臭 (大昭和誌第12号 2010年)

このところ、ヒロシマの体験談の依頼が続いた。理科教育でSSHに選ばれた県立船橋高校では、全校生徒に原子核と核外電子の相互作用の平易な説明とともに、広島市内で母を捜し歩いた際の体験も聞きたい、とのことであった。お茶の水女子大のホームカミングデーでは、私のメスパウアー分光学など放射化学の研究の回顧と放射能との遭遇、ということでヒロシマや死の灰の話になった。大妻女子大では、以前短大でヒロシマ体験談をしたせいか、ヒロシマの回想談を頼まれた。

これは、私が公開しているHPに関連の文章を載せているからかもしれないが、各校の現任教員も現在ほとんどが戦後生まれであり、私たちの年代は「古い時代」の骨董的体験を持つ貴重？な存在になったからかもしれない。実際に、岩波の日本史全書の時代区分は、終戦までが近代史で、現代史は戦後から始まっている事を知って驚かされたが、社会体制や考え方がそこで大きく変わったのだから当然とも思われる。

その近代史時代に多感な時期を過ぎた私も、ヒロシマの回想の資料作成の作業において、いつの間にか忘れ果てていた事柄を新たに思い起こす事になった。そこで、そのいくつかをご紹介します。

1.国民義勇隊法と義勇兵役法

竹槍が配られて町会でその訓練がされていた記憶はあるが、1945年6月の沖縄地上戦終結時期に、「国民義勇隊法」、「義勇兵役法」が相次いで公布されていたとは知らなかった。これらは男子15?60歳が対象であるから、本土決戦になっていれば軍部の計画ではそれらに基づく国民義勇戦闘隊2,500万人の編成計画もされていて、沖縄戦同様に地上戦で1億の国民の1/4が犠牲になったかと思われる。

国民義勇隊法や義勇兵役法の先がけとなる同年3月の国民勤労働員令では、12歳以上の学徒が対象とされ、国民義勇隊法でも国民学校初等科修了から男子65歳、女子45歳までが含まれた。中学校などの上級生は、すでに1943年6月の学徒戦時動員体制確立要綱で工場に狩り出されていたので、対象年齢を下げざるを得なかったであろう。



こうして広島市第6次建物疎開作業で、市中心部に集合していた市内の中学生、女学生、国民学校(小学校)高等科の生徒や、近隣市町村からの地域の義勇隊が8月6日(月)午前8:15の原爆炸裂に遭遇する。

原爆の威力は、爆発中心部で100万℃と見積もられ、放射線以外にも広範囲な電磁波の分布が考えられている。外部火傷だけでなく、電子レンジのマイクロ波のように人体の内部加熱で皮下層を灼熱破裂させた。実際に後述のように、私が8月6日に見聞した広島から帰り着いた大竹の義勇隊町民、被爆者の描いた絵、翌朝から母を捜し歩いた広島市内での被爆者や被爆死体の姿にもその例は少なくなかった。

私の出身校の県立広島二中の1学年は、1学級50余名の6学級編成で、そのほとんどの約320名が死亡し、本川の畔の同校慰霊碑の裏には全氏名が刻まれている。中国新聞社のHPには、それらの遺族などの約1/3からやっと集め得た生徒の遺影と末期の様子が公開されている。

その他、広島の川辺に並ぶ近隣市町村の「義勇隊」の慰霊碑は以前にも目にはしていたが、「義勇隊」の名称が義勇隊法という上記の法律に基づくものとはまでは思い及ばず、今回これら法令公布のあったことを見出し、あらためてその犠牲について考えさせられた次第である。

2.ヒロシマの死臭

当時は、防空法も改正され、国民は焼夷弾から街を防火用水で守る義務が課せられ、都市からの転出は非国民的逃亡と見なされた。広島でも夜間だけ郊外に仮避難する家族が不運にもその帰宅時に被爆した例もある。母はその郊外避難先もなく、爆心地から1kmの富士見町に一人で住み、広島二中から広島工業専門学校に進学したばかりの私は、山口県境に近い大竹町の三菱化学に勤労働員され寮生活をしていた。

8月6日の午前は配属将校の教練の授業予定で、軍人勅諭の暗誦テスト、暗誦できなければ徴兵後の幹部候補生推薦はできない事、が予告されていた。寮から別棟の教室に向かう際に強い閃光を感じ、ついで体に響く爆音が到達した。広島方向のよく晴れた青空での奇妙な入道雲の成長を私たちは不思議がりながらも、教室に入り、長文の軍人勅諭を口ずさんでいたが、満足に暗誦できる者はそう多くはなかった。

ところが予定時間を過ぎても配属将校は現れない。誰かが近くを通る山陽本線の列車の音がしない事に気付いた。鉄道事故でもあって配属将校が現れない事を私たちは喜び、自由な時間を楽しんだが、幸福は続かないことをすぐに思い知らされた。大竹町から広島市に建物疎開に出かけて戻った被災義勇隊の悲惨な状態を私たちも知るのである。

広島は全市が大災害というだけで詳細は誰にも判らないまま、多くが広島市に実家を持つ私たちは工場関係者や教員と相談をし、交通手段も途絶しているので、第一陣は徒歩で広島に向かった。夕刻になると広島の赤い空は色を増し不安は拡大した。工場が小発動機船を数隻調達し、その何台目かによりやく乗船でき、私が広島を流れる太田川の6支流の1河口に辿り着いたのは翌7日の早朝4?5時頃であった。

そのとき川面に力なく漂い泳ぐ魚は鮒であったろうか。掴めそうであったが、手をのべればふらふらと避けてはまた川面に浮かんでくる。よく見ると背びれが焼け落ちて肉が見える。やがて岸に上がり、市内のくすぶり焼け残った跡や多くの半焼遺体、火傷に苦しむ被爆者の姿を見て、あの魚が背びれを焼かれたまま泳いでいた事をはたと悟った。



富士見町の自宅はほぼ焼け尽くされ、残る石の門柱の間に波形トタン板に半焼の女性死体が置かれている。私は母の遺体が置かれたのだと思い、急ぎ大竹町に接する山口県和木村の親戚まで行き、遺体収容の助力を頼み、再び戻って一応、母の義歯を確認したら別人であった。

その後は臨時の救護所や各川面に浮かぶ焼死体を望見・検分し続ける5日間であった。火傷で体内の水分を失った被爆者の水を求める声、崩れた皮下に産卵した蛆の蛆の蠢きに喘ぐ苦痛の呻き声などを耳にしても、極限状態では感覚も心情も対数尺にまで麻痺して響かないのか、無感情のまま、ひたすら渡れる橋を選んで市内を探し回った。

広島湾の干満の水の流れに上下し溢れ漂っていた火傷の赤い死体も、3日目頃からは兵士や義勇隊？などにより岸辺に並べられ、焼跡の廃材と井型に積み重ねては火葬に付されていた。手足や首が焼け落ちるのを、黙々と繰り返し火中に投げ込んでは骨になるのを待つ。不完全燃焼であるから死臭は強かった筈であるが、私は母の探索に夢中だったからか、この死臭の記憶を全く忘れたままで9年が過ぎるのである。

3.第五福竜丸事件

母の探索を助けてくれていた親戚から「分骨でも貴い葬式を考えたら」との声も出始めた5日目の朝、村の寺から母が広島東南の坂村の学校に重傷者として収容されている、との連絡があり、ようやく運転再開された列車を乗り継いで出かけた。母は6日朝の警戒警報解除に安心しての就寝中に被爆、ガラスが全右半身、特に右腕動脈に突き刺さり、出血多量のまま東南方向に逃れ、陸軍輸送部の暁部隊の車で宇品、舟で対岸の坂村に収容され、母の隣の被爆者がお寺のお嬢さんで、その身内が和木村の親戚に寺から寺の伝言網で連絡されたのであった。

広島の現状を知らない母は私の来たのに驚いていた。どうにか止血が成功し、再出血ないように安静を厳命されていたが、その安静が幸いした。探索中の私を励まし、被爆者の救済連絡に走り回っていた無傷の級友はやがて2次放射能症で斃れ、富士見町内で助かった軽症の人も、家族を捜して奔走したためか母以外は全滅したと後日判った。

終戦も過ぎ、容態の安定した母を連れて和木村に帰ったが、隣の大竹町でも紫斑が出て亡くなるなど2次放射能障害死亡者が出始めた。母を診てくれていた医者も義勇隊参加のせいかな紫斑が出て亡くなった。

灸医者は造血機能改善には役立つだろうが、どのツボが効くか判らないので、頭頂から足の裏まで40数カ所のツボに灸をしてみると言う。私は朝夕これを実行し、小さい艾を手速く置き火をつける腕は上達した。年末には2000を下回っていた白血球数も次第に正常値の7000程度に回復したのはお灸のお蔭かもしれない。白血病での白血球異常増加も心配されたが、幸い正常値にとどまったままやがて数年が過ぎた。

卒業後には就職という方針を大学進学に大転換し、浪人はしたが幸い東大に入った。1951年末から結核で半年帰郷し、人工気胸療法を3年続けたが効果がなく、やっと日本でも可能になったストマイなどの服用となる頃の1954年春、ビキニ被爆の第五福竜丸事件が発生した。

3月の春休みに帰郷後、上京してみると木村研・南研は大忙しであった。そのうち4?5月には放射能雨が降り、核分裂生成物をイオン交換分離すれば無料で各アイソトープとして利用可能な量以上が屋上であり余るほど集められ、トレーサーとして多くの元素の研究ができ、それで何報か研究論文も書け、これが私の放射化学への入口になった。もっとも、母は「放射能」と聞いただけで恐れて反対していたが。

その半年後には、第五福竜丸の久保山愛吉氏が死去された。この年は、夏の洞爺丸事故、春からの造船疑獄、犬養法相の指揮権発動、吉田茂首相の国会喚問問題など内紛が続き、米国への福竜丸被爆補償に関心も薄かったのか見舞金で決着し、年末には鳩山一郎内閣になった。

研究室では東大病院の依頼で故久保山氏の内臓の放射能分析が始まっていた。木村先生はこのような外部委託事項は院生などにはさせないで臨時職員や研究生にさせられ、当時学習院大から研究生として研究室に来ていたご子息の幹さんと、その他の臨時職員が、ドラフトでいくつかの内蔵の小片を坩堝で灰化して分析試料としていた。

ドラフトは改善したばかりで強力ではあったが、そのとき、かすかに漏れて来る特異な臭気が、突如、9年前のヒロシマの死臭と同じである事を私に思い起こさせた。原爆当時はもちろん、その後もすっかり忘れていたはずの体験や記憶が、同時に一挙に復活したのである。

臭覚の記憶は新鮮なまま残る、と聞いたことがあるが、まさにそれは立体的であり、死体を山積みにして火葬していたときの情景などまで、今度は実尺で復元され、私は化学教室の建物の外に出ってしまった。

ちなみに、分析結果は、翌年春、京都大学での日本化学会年会で木村幹さんから口頭で発表されている。

4.歴史の遺臭

今年の5月にも広島二中の同窓会があり、久しぶりに参加した。総勢260名の6割は原爆で物故し、連絡可能者は約百名であるが、集まったのは20名だった。

私は広島を訪れるたびに慰霊碑、平和記念公園や資料館などにも立寄る。公園の新緑は美しく、資料館の資料もその都度整備の進んでいる事がわかる。そして、当然ではあろうが、そのどこにもヒロシマの遺臭はない。その名のとおり、平和であった。

歴史は残っても、歴史の遺臭は、このようにやがて消えて行くものかもしれない。慰霊碑に手を合わせながら、その思いが永く残った。

- 完 -

泳ぐ焼き魚	死因は二次放射能障害	白魚	原爆忌を迎えて	濡れた千羽鶴	ヒロシマの遺臭	朝日新聞記事
--------------------	-------------------------	-----------------	----------------------	---------------------	----------------------	---------------------